

令和5年度 第1回八戸産学官連携推進会議 議事録

日時：令和5年10月20日（金）14:00～14:45

場所：八戸市庁本館3階 第三委員会室

○司会(八工大・高橋教授)

ただいまから、「令和5年度 第1回八戸産学官連携推進会議」を開催いたします。はじめに、本日もお配りした会議資料を確認いただきたく存じます。本日の会議資料は、次第、出席者名簿、席図、「資料1：令和4年度 第2回八戸産学官連携推進会議 議事録」、「資料2：産学官連携による八戸未来創造中長期計画進行管理指標集計結果」、「資料3：八戸地域学について」、「資料4：今後の産学官連携による取組（案）について」となります。過不足等はありませんでしょうか。それでは議事に入りますので、熊谷市長に進行をお願いいたします。

○熊谷会長(八戸市長)

それでは、しばらくの間、議長を務めさせていただきます。まず、「案件(1) 令和4年度 第2回推進会議の議事録」について、事務局から説明をお願いします。

○事務局(八学大・田中教授)

それでは、「令和4年度 第2回推進会議 議事録」について御説明申し上げます。資料1の「令和4年度 第2回八戸産学官連携推進会議 議事録」をお手元にお配りしておりますが、本日は要点のみ御説明いたしますので、後ほど詳細を御確認ください。

前回の議事においては、「副会長の選任について」、「八戸地域学の開催実績について」、「令和5年度事業計画（案）について」に関して、委員の皆様にご議論いただきました。

まず、副会長の選任につきましては、熊谷会長からの指名により、八戸商工会議所の武輪委員が副会長に選任されました。また、八戸地域学については、第1回の講義は熊谷市長に、第2回は坂本学長に、第3回は塚原副会頭にそれぞれ講師を務めていただき、学生へのアンケート結果から、大変興味深い内容であったとの評価をいただいたということを御報告したところであります。令和5年度の事業計画（案）については、八戸地域学を引き続き実施するという事で、講義内容が同じ分野に偏らないように、全体計画を描きながら講師選定を進めていくことを御説明いたしました。御意見として、水野委員からは、八戸地域学について、今後、学内のカリキュラムの中でどのように落とし込んでいくか議論したいという御発言がありました。杉山委員からは、今年度のカリキュラムで「地域文化論」を設け、そのコンテンツで使うということと、学生が消化しやすい内容をもう少し絞っても良いのではという御発言がありました。圓山委員からは、60分の動画ではなく、コマ切れで興味があるテーマだけを視聴できるようにしても良いのではという御発言がありました。坂本委員からは、御自身が講師を務めた感想も含め御発言いただき、今後も多くの八戸ファンを増やしていくために、市民にも聞いてもらいやすい形でメニューを組んでいければ良いという御発言がありました。武輪委員からは、中心街の賑わいづくりには学生をはじめ若者の力が有効なので、そうした人達がやりたいことを実現できるサポートができれば良いという御発言がありました。熊谷会長からは、

対話をしながら若者の関心をより惹きつけて地元定着につなげていく必要があり、丁寧に対応しながら継続して実施していくが必要であるとの御発言がありました。最後に、塚原副会頭から、「はちのへ活性化プロジェクト」に係る3つの委員会組織についての説明がございました。以上が、前回の議事の内容となっております。事務局からの説明は以上でございます。

○熊谷会長(八戸市長)

ただいまの説明に対しまして、御質問や御意見はありますでしょうか。特にないようですので、以上でこの案件を終わります。

続いて、「案件(2)令和4年度の進行管理指標集計結果」について、事務局から説明をお願いします。

○事務局(八学大・田中教授)

それでは、「令和4年度の進行管理指標集計結果」について、御説明申し上げます。資料2を御覧ください。こちらは「産学官連携による八戸未来創造中長期計画」の進行管理指標のデータをまとめたものになります。

まず、1ページ目は、6つの指針ごとに進行管理指標を定めた一覧でございます。続いて、次のページのグラフを御覧ください。6つの指針ごとに定めた進行管理指標について、各項目の5か年の推移をお示ししております。本日は、特徴的な項目を抜粋して御説明いたします。まず、1-③「外国人留学生数」についてですが、右側の全体合計を御覧いただければと思いますが、外国人留学生の数は年々増加傾向にあり、今後も増加が見込まれることが予想されます。次のページにまいりまして、2-②「観光入込客数」や2-③「プロスポーツ観客数」については、令和2～3年がコロナの影響で減少したものの、令和4年は回復の兆しを見せており、今後も増加に向かうものと考えております。一方で、3-②「地元企業就職率」は、前年度よりも数値が減少しているところが多く、コロナ禍からの回復により市外へ就職希望する学生が増えたことが要因と思われます。次のページにまいりまして、4-①「まちづくり活動の企画数」は、全体合計で年々減少している状況であります。5-①「中心市街地で展開する講義数」では、八戸工業大学の講義数が増えている状況となっております。次のページにまいりまして、6-②「公開講座数」では、八戸工業大学において年々増えている状況であります。今後も引き続き、数値の動向を注視してまいります。事務局からの説明は以上でございます。

○熊谷会長(八戸市長)

ただいまの説明に対して御質問はありますでしょうか。質問等がないようですので、この案件は以上で終わりにいたします。

続きまして、「案件(3)八戸地域学について」、事務局から説明をお願いします。

○事務局(八学大・田中教授)

それでは「八戸地域学」について、御説明申し上げます。資料3を御覧ください。八戸地域学は、地域の歴史や文化、地域の産業等を学び、地域への理解や愛着の醸成を図ることで、若者の地元定着につなげていくことを目的に、各高等教育機関共通の講義として実施するものでございます。

まず、「1.令和5年度の講義について」ですが、第1回講義は、八戸商工会議所の武輪会頭を講師に、「漁業及び水産加工を含むハマの現状と今後」をテーマとして、11月2日木曜日、16時から「はっち広場」で行います。第2回講義は、八戸工業高等専門学校の土屋校長を講師に、「地産地活

のエネルギー」をテーマとして、11月8日水曜日、16時から、同じく「はっち広場」で行います。第3回講義は、八戸市立市民病院の今事業管理者を講師に、「ドラマを超える劇的救命」をテーマとして、11月16日木曜日、16時から、同じく「はっち広場」で行う予定しております。なお、熊谷市長におかれましては、別途、昨年の動画の撮り直しを行う予定でございますので、御報告させていただきます。

次に、「2. 講義の進行及び配信について」ですが、昨年度と同様に講義時間は約60分とし、講義資料はスクリーンに投影することで、集まった方が見られるようにしたいと思います。当日の進行は、講師が所属する機関において務めることといたします。講義動画につきましては、当日にビデオカメラで撮影した映像を動画編集し、YouTubeの閲覧限定にて各校に配信する予定であります。なお、昨年度と同様に、講義終了後、その場での市民からの質問は受けないで終了としたいと思いますが、学生については、後日、アンケート調査を実施いたします。事務局からの説明は以上でございます。

○熊谷会長(八戸市長)

ただいまの説明に対して、御質問はありますでしょうか。それでは、「案件(4)今後の産学官連携による取組(案)について」、事務局から説明をお願いします。

○事務局(八学大・田中教授)

それでは、「今後の産学官連携による取組(案)」について、御説明申し上げます。資料4を御覧ください。

産学官連携推進会議では、「八戸未来創造中長期計画」を策定しており、その中で、数値目標として、15～29歳の若者人口増減数を中期に、すなわち2025年までにマイナス2,000人まで抑制し、長期、2045年までに増減を均衡させるとしております。この数値目標を達成していくために、指針1から6までの中に、具体的な事業を位置付けて取組を進めていくこととしておりますので、この動きを加速させていきたいと考えているものでございます。

そのような中、令和6年度に向けた取組案として、まずは、地域のニーズや産業界が求める人材がどのようなものなのか、また、今後、人手不足等から外国人材のニーズが高まることが予想されますことから、介護・福祉事業所等も調査対象に含め、様々な視点によるニーズ調査を実施していきたいと考えております。また、左側の表の中には、指針1から指針6までの中で、想定される取組(案)を記載しておりますが、今後、このような取組を行っていくための具体的な検討を行っていききたいと考えております。

さらに、取組を加速させていく中で、新たな組織体制の設置を検討していきたいと考えております。具体的には、本日、この会議の後に予定されております「八戸市都市研究検討会」について、これまで、平成21年から第15弾テーマまで実施してきた八戸版シンクタンクですが、この都市研究検討会と八戸産学官連携推進会議を統合させ、学と官のみならず、産も含めた形で、産学官で取り組むべき課題や取組(案)などを調査・研究する部会のような組織へ再編できないかということを検討していきたいと考えております。その際、事業を進めていくとなれば予算も必要となってくることから、必要な財源については、内閣府の「デジタル田園都市国家構想交付金」の活用を想定しながら、事業の設計を行っていききたいと考えております。事務局からの説明は以上でございます。

○熊谷会長(八戸市長)

ありがとうございます。ただいまの説明に対して、御質問はありますでしょうか。それでは、案件はこれで終わりました、これまでの案件説明も含め、全体を通して何か皆様方から御意見等を頂きたいと思います。それでは、水野学長からお願いいたします。

○水野委員(八学大学長)

まずは、事務局の皆さんに本当にここまで分析いただき、まとめていただいて、感謝を申し上げます。その中で、議事録の報告がありましたけども、私が半年前に言ったことを今改めて読み返して、ちゃんと復習していなかったなど反省しております。ここでは、学内に持ち帰り、単位化を検討すると言っておきながら、すっかり忘れていたという情けない状況で、今回はしっかりと復習したいと思っております。加えて、系列校への発展という可能性も検討すると言っているということで、反省モードから始まりました。

2件目の進行管理指標の報告、ありがとうございます。本当に大変な作業で、まとめていただいて感謝申し上げます。特に気になったところが、指針3-②の地元企業就職の割合は、おそらく職種によってもかなり変わってくると思うので、こういう指標をどう活用するかといったときには、この八戸圏域でこういう人材が本当に必要とされているけれども、地元にはその職種は残っていないよねということが見えてくると今後の取組の参考になると思います。従って、大学ごとにまとめるということも大切ですけども、職種よっての傾向も見てみるということが必要なのかなという感想を持ちました。八戸地域学は、今年度で6コマが増えていくということで、しかも市長も撮り直しということで、よろしく願いいたします。本当に中身が充実してきているので、今後は講義動画等の活用状況も、6回の講義を踏まえて、各教育機関でまとめてみるということも1つの方向性かなと思って、御報告を伺いました。

最後、今後の産学官連携による取組については、非常に前向きな提案をいただいたと思っています。今後、市長のコメントもいただきながら、どのように展開していくのかというのがとても興味があるところで、私の個人的な気持ちとしては、本当に1つになって進めていってもいいのかなと感じました。

情報共有ですけれども、実は昨日、県庁の商工労働部の部長さんと弘大の地域連携の担当で副学長がお見えになりまして、県レベルでも産学官の連携のプラットフォームを作って取組を始めたいという御提案でした。「COC+」といって、青森県内の大学が連携して人材育成をしながら、地元定着を推進していこうという取組を行っていましたが、その後継プロジェクトとして、県でしっかりプラットフォームを作って、その取組を発展させていこうという提案で、八戸ブロックは高専が主管でしたので、土屋校長の方には提案があったのではないかと思います。

○南教授(八戸高専校長代理)

はい。前日に来られて説明いただきました。

○水野委員(八学大学長)

そうでしたか。今日、坂本学長にも簡単に報告させていただいたのですが、この会議の時に、八戸地域学のことをかなり熱く語りまして。そうしたところ、今回の3つの柱の中で1番目に「郷土愛の育成」という人材育成、単に就職の斡旋ではなくて、大学の1、2年生のレベルから、しっかりと郷土の魅力や強みをしっかり学んでもらおうという、そういうものを組み込む。そして、「就職促進へ向けての活動」が2番目、3番目に「情報共有」というような取組を柱にするということで、まさに

八戸の取組をモデルにしていただけると非常に嬉しかったこともありますし、更にこの八戸地域学を、いかに大学・高等教育の学びの場にしていくかと同時に、先ほど田中先生から御報告があったのですが、地元の魅力・強みの発信について中学生が非常に感度が良いというお話があったので、高校・中学、そして小学校、この地域の魅力をいかに学びの場で伝えていくかというところ。そして地元の高校・大学に進学していくという、子どもの数が減っていく中で、地元愛に満ちた子どもをいかに育てていくかということも、1つの高等教育であると思いつながらの活動というのが必要になるのかなということで、昨日お迎えしていろいろお話を聞いたところでしたので、情報共有させていただきます。以上です。

○熊谷会長(八戸市長)

ありがとうございます。次に、杉山学長お願いいたします。

○杉山委員(八短大学長)

まず、八戸地域学についてなんですが、前回、短大で今年開講した「地域文化論」の中で、このコンテンツを使わせていただくというお話をさせていただいたのですが、介護福祉学科ではこの前期、幼児保育学科ではこの後期から地域文化論を開講しておりますが、科目の担当者と色々相談いたしまして、コロナ禍明けということもありますし、できればやはり対面で話してもらった方がいいのではないかとこの意見がありまして、今のところ、ゲストティーチャーで地域の方に来ていただくということを進めておりまして、このコンテンツの活用にはまだ至っていないということで、お詫び申し上げます。

あと、この進行管理指標の3-②の「地元企業就職率」ですけれども、前も申し上げたことがあったような気もするのですが、この地元が何を指すのか。短大につきましては、比較的パーセンテージが高いところではあるのですが、学生にとっての地元ということでありまして、短大生は大体、青森県の県南地域と岩手県北から来ているのですが、例えば久慈から来ている学生であると久慈に戻って就職するとか、東北町から来ている子であれば東北町に就職するとか、そういうものがありますので、仙台とか関東は明らかに地元を離れているのですが、そういった観点で見ると実際にはもう少し学生の地元への就職率というのは、実際にはもうちょっと高いということをお願いしたいと思ました。

それから、進行管理指標の1-③「外国人留学生数」というのがありまして、短大につきましては、この留学生は全て、介護福祉学科に来ている学生でございます。今年度は9名、タイとインドネシアから来ております。彼らが介護福祉士の資格を取ってこの地域で就職するというところにつきましては、卒業後、就職予定のところが予め決まっています、そこからの金銭的な支援とか生活面での援助を受けて短大での学生生活を送り、国家試験を受けて、今まで全員合格しています。合格して、地域の支援を受けていたところに就職するという形のモデルで、留学生を受けております。そういう形のモデルを動かしているところですので、今後の産学官連携による取組(案)についてというところの指針3つの中に、地元企業等のニーズに応じた外国人財・留学生の確保育成というところがありますので、やはり介護人材の不足というのは、保育士ももちろんですが広く認識されている所だと思いますので、ぜひそういった外国人学生、介護で働こうという留学生の育成に向けて、市も一緒に取り組んでいただくとありがたいなと思った次第です。以上です。

○熊谷会長(八戸市長)

ありがとうございます。続きまして、南教授お願いいたします。

○南教授(八戸高専校長代理)

土屋校長と別かもしれませんが、今私が思うところを述べさせていただきます。まず、進行管理指標が出ておりますけれども、非常に苦しいのですが、地元の就職率、実はうちが低くて、10%行っておりません。大体1年で180名卒業しますが、おそらく14~15名ぐらいしか地元に残っておりません。これは、高専は短大ですけれども、まず大きなのは、大学への進学・編入が多いということです。今年の割合で大体50%です。全国平均の高専が60%ということで、機構全体が進学を進めるようになっております。それから、民間企業ですけど、多く卒業生が都会の方に行ってしまいます。都会への憧れもあるでしょうし。ですので、ここで10%と言っておりますのは、ほとんどが公務員で県庁とか市役所、あるいは原燃などに就職する人で、これ以外は県外に出てしまうというのがうちの学校の実態です。学生を止めることはもうできません。我々としては、財団をつくりまして、例えば、大学を卒業したら青森県内の企業に戻すとか、あるいは東京に就職して定年を迎える、あるいは戻ってきたいという卒業生に対して県内の企業を斡旋するという機能を持たせた財団をつくりまして、帰ってきてもらうことを考えて我々はやっております。それで9月ですね、誘致企業と八戸市との懇談会があったかと思っておりますけども、そのときに八戸市さんから、東京から帰ってくる方には最大100万円を支援する制度があるという話を伺いましたので、我々が作った財団とその機能をタイアップできないかなと考えております。我々が今思っておりますのは、卒業と同時に留めるのはちょっと難しいのではないかと。行った先から帰って来いというような施策をとって、地元定着に結び付けたいなということで考えて動いておりますというのが、現状でございます。

また、先ほど水野学長からもありましたように、県の調査で小・中学生に地元が好きですかと聞くと、大体8割が好きですと答えるんだそうですね。多分、水野学長は御存知だと思いますが、高校生になるとこれが20%になるんだそうですね。要は、小・中学生は他の都市を知らない。ところが、高校生は修学旅行に行つて他を知ってくるとあっちがいいなど。特に高校生の先生が言うのは、修学旅行でディズニーランドに連れていくなど。電車の渋滞するところを見せた方が、いかに八戸がいいかというのが分かるのではないかという話がありました。それを思い出したところ、せっかく今、八戸地域学というコンテンツを作っておりますので、大学とかだけじゃなくて、中高生も見れる方がいいのかなと改めて思った次第です。

最後になりますけれども、来年度の取組(案)ということで、私が今思っておりますのが、①の「ニーズの調査」ですね。地元の企業にどんな会社があつて、どんな人が求められているのかというのを私としてはぜひ知りたくて、我々は高校1年生からキャリア教育がありますので、地元の魅力を伝えるコンテンツになるかなと思ひまして、ぜひこれを実施していただいて、どんな人が必要なのかをお知らせいただければなと思っております。以上です。

○熊谷会長(八戸市長)

ありがとうございます。続きまして、坂本学長お願いいたします。

○坂本委員(八工大学長)

私からは2つほどお話しさせていただきます。1つ目は、今話題に出ておりました地域学の件ですけども、昨年私も講演させていただいて、学校内で既に実施いたしました。昨年は、八戸学院大学さんと色々な方々のレポートも拝見いたしましたし、今年もレポートを見ておりますが、その中でやっぱり嬉しいなと思うのが、別にこんなの学ばなくてもいいやと思う学生さんが、「ん、これ待てよ」と。自分の地域のことをこんなに知らなかったのか。地域のことを知ることをしないとだめだ

と、自分に発破をかけるようなレポートがすごく多くて。それともっと大事なのが、自分の家族にこういう話があったと伝えたり、実際私なんか現場に行ってみた写真を残しているの、それに感動して、私も行かなきゃいけないというようなことを盛んに言われていますし、八戸以外、津軽や他の県から来た方も、我々の意図するように、自分は地元じゃないけれども、自分の地域にももっとすごいことが埋もれているに違いないと、改めてそれを調べてみたいというような話が非常に多かったことが、本当に嬉しかったなと思っております。こういうことは、また今年度も続くということが、今日の資料3で御報告いただきました。多分これが来年、再来年と続いていけば、相当な財産がここに貯まるということになると思いますが、こういうことをやっているということを市民の方が理解するというのが、次の段階として非常に大事だなと思っておりまして、学生にこういう教育やっていますということを、どっかで聞かれた時とか、ちょっと新聞に出たりとか、いろんなどころであると思うんですけども、実際に八戸市、産業界、大学・高等教育機関がスクラムを組んでこれをやっている、学生をこういうふうに育てているんだということを市民の方が理解していけば、更に先ほど言ったように、市民の方に学生が伝える。市民の方は他の方に伝えるという形で、どんどんこの地域が発展していくのかなと考えているところです。また、その学生さんが地域に関して関心を持った、小さい時からこういうふうに関わってきたけども、ここで聞かされた事実と合わせてみて、そういうことだったのかという気付きとか、そういったものがある。これが、地元愛そして地元への就職というものにもつながっていくのだらうなと感じているところです。今後ともこうした取組を継続させて、それから昨年、学生さんからの質問に対して回答、市もみんな作られたと思いますが、その結果がどういうふうなフィードバックされて、学生さん達がそれに対してどのような思いをされていたのかというのがちょっと気になったところですけれども、もしチャンスがあればお聞かせいただければ幸いです。

地域学に関しては以上ですけれども、もう1つの件は、産学官連携による今後の取組ということで、資料4で御説明いただいたところで、これはやってほしいなと思ったのが、③の「新たな組織体制の設置・検討」というところで、産官学がスクラムを組んで様々な課題に立ち向かうということが、これからこの地域にとっては非常に大事だなと感じているところでございます。ぜひ実現させていただければと思うところでございます。以上です。

○熊谷会長(八戸市長)

ありがとうございます。それでは、武輪会頭をお願いします。

○武輪委員(八戸商工会議所会頭)

前回の会議で、塚原副会頭からでしたけれども、新たに始める「八戸活性化プロジェクト」について説明をさせていただきました。これは、現状、この地域が抱える課題、コロナ禍ということもあって、中心街の問題、観光、取引拡大の3つについて取組をさせていただきましたけども、この組織は当所の議員の他に会員も含めながら、八戸市役所の方、高等教育機関の方にも参画していただき、今進めているところです。その中で、大学・高校から御協力いただいて進めております「ホコテン」ですが、明後日が今年度最後のホコテンになりますけれども、企画を高校生が中心に行っております。大学からも助けていただいていると伺っておりますが、大変協力をいただいていることに感謝し、皆さんも御都合が付けば、見ていただければなと思っている次第です。

それから、産学官連携となると、産業界からするとどうしても高等教育機関はまずは求人先ということで、そういう対象での考えが大きくなるわけですけども、地元への就職率が低いということ

について、この地域のそれぞれの企業が行っている仕事の周知が足りないのではというような話を、雇用対策協議会などの会議の場で聞いたりすることがあります。普段、黙っていればそういう職場の中に入ることがないわけですから、知らないのも最もだと思いますので、私なりの思い付きではありますが、各企業の仕事の内容が分かるような動画を作って、高校生を含めた学生が見ることができないのかなということも以前からも考えたりしています。それを基に、実際この職場で働いてみるという意欲がある人達にインターンシップでその職場に入ってもらって、そして就職につなげるというような形ができれば、少しは定着率が上がるのかなと私なりに思っているところです。私どものところは、近くにあります高等支援学校さんからの、インターンシップとは言わない体験なんかというのでしょうか、2年生の時から3年生と2か年続けて企業で体験をして、そして入社するという形があります。普通の高校ですと、求人につながる実習というのが認められないというのが、求人がスタートするタイミングというのが決められているので、それより前にやってはいけないということは聞いたことがあります、本当に職場に定着する、この職場を選ぶということは、高校生についても支援学校の生徒と同じように共通に必要なことだなどと思っていますので、そういうことを考えていければいいなと思ったりしています。

あと、大学の方のインターンシップというのはどういう位置付けで、就職の前提ではなくキャリア教育の一環としてということなのか、その辺が私分らないところがあるものですから、現状どういう形でどれぐらいの割合の学生がインターンシップをどういう目的で行っているかということの後でお聞かせいただければと思います。以上です。

○熊谷会長(八戸市長)

ありがとうございます。今、皆様から色々と市に対しての御提言といえますか要請の様なものもありましたけども、1つ1つは今ここでお答えできませんが、受け止めて対応を進めてまいりたいと思います。

それから、地域学について様々御発言をいただきました。私は撮り直しということですが、出来上がりが悪かったということではなくて、第7次総合計画を推進していくための戦略を毎年見直しております、新しい戦略に合わせて替えるべきだろうということで、撮り直しをさせていただきますので、よろしくお願いいたします。

それから、中長期計画の進行管理に基づいて様々御発言をいただきましたが、やはり若者の地元定着を図っていくために、実は、若者と女性の10人にお集りいただいて「まちの魅力創生ネットワーク会議」という会議を開催し、先日御提言をいただいたのですが、その中に、高校生も含めて子どもの頃から八戸の魅力を伝えていく必要があるだろうということで、そうしたことを事業化ができないかという提言をいただいて、それを提言で終わらせるのではなくて、提言の内容に関わりがある部署の職員と意見交換をした上で、具体的に事業化・予算化につなげていくための作業をこれから進めていくことにしておりますが、やはり若い人たちに高校・小学生の頃から魅力を伝えていくという取組を進めていかなければいけないと考えております。それともう1つ、若者の活躍の場ということで、起業・創業支援を現在も行っておりますが、今度、これを拡充いたしましてプラットフォームを作ります。そこには高校生もかなり入ってきていただくことになっております。大学生もそうですけれども、こうしたプラットフォームの中にも若者の居場所を作っていきたいと考えております。

少し話はずれますが、この進行管理指標の中にプロスポーツ観客数やまちづくり活動の企画数などがありますが、先週、八戸で「全国都市問題会議」を開催いたしました。これは全国の市長・市議会議員・行政関係者、約1,800人にお集りいただいて会議を開いたのですが、商工会議所さんには大変

御指導いただきましてありがとうございました。そのテーマが、「文化・芸術・スポーツによるまちづくり」でした。90年以上の歴史ある会議であり、例年はもっと幅の広いテーマを設定するのですが、文化・芸術・スポーツによるまちづくりに関しての素晴らしい講師の方もいらっしゃったということもあり、広がりを見せまして、文化・芸術・スポーツによるまちづくりの可能性を感じました。八戸の場合は、そこに中心市街地の活性化ということも結び付けておりまして、そういったことから言いますと、中心街を含めて、若い人たちに文化・芸術・スポーツそして中心街というところでの活躍の場を作っていけたらなと思っております。

それと、今後の産学官連携の中で、令和6年度に向けた取組のニーズ調査の設計。やはり地元企業でエネルギーをはじめとする原材料価格の高騰に加えて、人材の確保・育成というのが非常に大きな課題になっていると思いますので、非常に大事なことだと思いますし、外国人人材につきましても、昨日か一昨日ぐらいに国の新しい考え方も出されておりますので、そうした事も踏まえながら外国人人材についても調査を実施して、様々な策を検討していく必要があるのではないかと考えております。

それから、新たな組織体制の設置検討の中で、研究会と会議は統合するという事です。私もまだ2年しか経っていないので深く申し上げるような段階にはないのですが、連携を図りながら、更に進化させていく時期に来ているのではないかと考えておりますので、私もこの考え方には賛同したいと思います。私からは以上です。

皆様から御発言をいただきましたが、そのことも含めて「その他」ということで、何かございましたら御発言いただきたいと思っております。

○坂本委員(八工大学長)

先ほどの武輪会長さんのインターンシップの件ですけれども、正直に申し上げまして、私の口から明快な答えが出ないのですけど。なぜかと言うと、私も大学に勤めて38年になりますけども、初期の頃は、キャリア教育の一環を強く打ち出していた気がしますが、最近は就職先というのが念頭にあって入る場合というのも結構増えてきたと思います。未だに色々なことを経験してという方もいると思いますが、現場の方から何か補足があればお願いします。

○金子教授(八工大)

おそらく、表向きはキャリア教育。本心は就職のためです。

○武輪委員(八戸商工会議所会頭)

割合はどれぐらいの学生さんが経験されますか。

○金子教授(八工大)

うちはおそらく20~30%ぐらいですかね。

○高橋教授(八工大)

20~30%が限度だと思います。

○金子教授(八工大)

一日だけなど、インターンシップにも色々あって、そうしたものも含めると70~80%ぐらいになるかもしれません。一週間など、少し長目のものになれば20~30%くらいだと思います。

○高橋教授(八工大)

地域的にも、全国の企業でインターンシップを受け入れる企業がありますし、その中で学生は、東京や遠方の様々な企業のインターンシップを条件みたいにしていくというのがあります。大学側としても、正直に言えば、採用に結び付けるためインターンシップを開くというのが企業さん側でいいと思います。大学側は、そここのところに教育を乗っけているだけなんです。地元の企業さんでも、この辺の青森県内の企業さんでも、そういったインターンシップの受け入れをしてくれる企業さんを増やしていきたいなというのは大学側の思いでもあります。できれば1週間とか2週間、厳しく働かせてもらえれば。そういったのは大学側の思っているところです。

○水野委員(八学大学長)

学生から見た時に、インターンシップというのは就職に結び付けるということで、やっぱり4年生や3年生が中心になると思いますが、先ほど御紹介した青森県の人材育成の協議会で目指して欲しいと私が協調したのは、就職に結び付くためのインターンシップではなくて、地元愛を育てる、地元の魅力・強みを学ぶためのフィールドスタディの様な形で、1年生・2年生のうちから企業に入って行って、企業が抱える問題や課題と一緒に解決に向けてチャレンジできないかと、そういう地域を学びのキャンパスにするという方向性で少し考え直していったらどうだということで、学校内で議論を進めさせていただいています。したがって、できるだけ多くの企業に入っていただいて、学生を受け入れていただいて、キャンパスで学生を育てるのではなくて地域で一緒に育てていくという思いが、八戸圏域で育ててくれたらなという思いで、今取り組んでいるところです。

○武輪委員(八戸商工会議所会頭)

どちらも大学が一旦受け入れて、学生に掲示をしてということで、大学サイドでは全部把握できているということでしょうか。

○高橋教授(八工大)

一応把握できていますし、こういった企業さんが説明も全てやって、その中で募集かけています。

○武輪委員(八戸商工会議所会頭)

ありがとうございました。

○南教授(八戸高専校長代理)

高専のインターンシップを紹介させていただきます。我々は本科と呼んでおりますが、高校3年と短大には、我々本科と呼んでいます。ですので、5年生になって就職します。インターンシップは4年生にさせます。4年生は全部で160人いて、5日間やると1単位、10日間やると2単位と単位認定しております。高専としては、全員行きなさいと指導しております、コースによって多少違うのですが、約9割近くがインターンシップに行っております。その上に専攻科と呼ばれるものがあります。専攻科1年生、要は大学の3年生に関して、同じようにインターンシップを推奨しております、最大1か月、4単位まで認定しております。ですので、学生によっては1か月行くことがあります、1年生に関して、もちろん全員行きなさいというふうにしてインターンシップを推奨しています。もちろん4年生ですから、8・9月に行きますから、4月から就職、最終年度になるわけですけども、会社を決めてこの会社に行きたいから見に行くという学生もいますし、それから、例えば

こういった分野に行きたいんだけどっていうと、関連するところに行ってきたらいいとか、あるいは公務員やりたいという学生がおりますと、青森県とか八戸市さん、国交省さんに行って、どんな職場か見てきたいということで決めて行く学生もいるし、分野でどこに行きたいという方もいて。いずれにせよ、とにかく全員行ってきなさいと。例えば、青森県ですとパートナーシップを結んでおりまして、学生がインターシップに行きたいとなると、青森県が地元の会社を紹介してあげますというパートナーシップを結んで、学生ができるだけ希望に沿うところにインターンシップできるようなことをサポートしてくれています。基本的には、将来行きたい会社を選択するために行ってきたらいいと。

それと、うちの学生は50%進学するんだという話をしました。大学行っても結局就職するわけですから、今のうち特に地元企業を研究して、大学行って地元の企業に帰ってきてくれという思いもありまして、できるだけ地元の企業、八戸市だとか県内の企業をできるだけ勧めるようにしております。以上です。

○熊谷会長(八戸市長)

ありがとうございます。他に御発言はございますでしょうか。

○水野委員(八学大学長)

よろしいですか。市長のコメントを少しいただきたいなと思ひまして。今のお話しの発展バージョンで、Uターンの話ですけれども、高専さんは財団を作ってということで、積極的に卒業生を八戸へと。本学も看護学科の場合は一定数、奨学金の関係で関東に就職しておりますが、奨学金を返済した後、こちらに帰ってくることに興味を持っているという学生もいるとのことで、Uターンに関する活動をしていきたいという望みはあります。千葉学園も同じような問題を抱えていて、卒業後に関東圏に行ってしまう。そういう状況にある中で、八戸市として、とりあえずどれか頑張るというのではなく、同じような問題・悩みを抱えている、この地域の若者の人数を増やしていける可能性があるというような取組を、統括的に力を合わせて一緒に取り組めないかという可能性はないのかなと。あるいは、そういう部局はどこに相談したらいいのだろうかという質問でした。

○熊谷会長(八戸市長)

良いお考えであり、検討の余地はあるかと思ひます。また、どこの部局が担当かということになると、これは総合政策になります。受け止めさせていただきます。

○水野委員(八学大学長)

8baseもありますし、ああいうところをうまく活用しながら。学生も卒業生も知らない者が多いんですよ、結構。だからそういう情報発信もしながら、何か興味を持ってもらえるという活動に繋がるかなと思ひっております。

○熊谷会長(八戸市長)

かしこまりました。ありがとうございます。

それでは、最後に、八戸市商工課から皆様に御説明したい案件があるとの申し出がありましたので、説明させます。

○商工課(淡路次長)

八戸市商工労働まちづくり部商工課の淡路でございます。今年度、重点事業として実施しております、先ほど市長からもお話しいただきました「企業支援プラットフォーム事業」につきまして、今後取り組みを着実に推進するためには、市内高等教育機関の関係者の皆様に事業の主旨を御理解いただきまして、様々な場面で連携・協力をしていくことが重要となりますことから、本日各校の学長・校長の皆様に御説明するための機会を設けさせていただきました。ありがとうございます。御多用のところ恐れ入りますが、少しの間お付き合いいただきますよう、よろしく願いいたします。

それでは本事業の概要を説明いたしますので、ただいまお手元にお配りしました資料を御覧いただきたいと思っております。「8サポ起業支援プラットフォームの構築について」というタイトルが付いてございます。まず、「1事業の趣旨」でございますが、北東北を代表する産業都市として将来にわたって経済をけん引していくためには、地域の経済界で活躍する人材の更なる輩出とともに、起業家等の交流促進による新ビジネスの創出やスケールアップの機会提供が重要となります。このようなことから、はちのへ創業・事業継承サポートセンターの機能を拡充する形で、「起業支援プラットフォーム」を構築し、同プラットフォームのコミュニティ活動を通じまして、起業・創業への関心向上や起業家同士の交流機会の創出を図りますとともに、8サポの相談窓口と連携した面的な起業・創業支援を行うものでございます。

次に、「2設置目的」でございますが、「起業・創業への関心向上」、「起業・創業希望者の支援」、「起業家同士の交流促進」の3つでございます。

続いて、「3プラットフォームの概要」でございますが、まず、「(1)コミュニティの運営」につきましては、「学生起業チャレンジコミュニティ」、「スモールビジネスコミュニティ」、「新ビジネス創出コミュニティ」の3つのコミュニティを組成し、それぞれにコミュニティマネージャーを1、2名配置いたします。1つ目の学生起業チャレンジコミュニティは、企業・創業への関心向上を目的に、八戸学院大学の井上 丹 先生に運営をしていただきます。このコミュニティへの参加を通じまして、高校生や大学生が在学中からビジネスに触れることは、社会人としてのキャリアの視点に起業・創業という新しい選択肢を加える機会になると同時に、企業への就職という選択をした場合でも有用な知識が得られるものと考えております。2つ目になります、スモールビジネスコミュニティは、起業・創業希望者の支援を目的に、PointFive株式会社を営みます野田 賀一 氏とコワーキングカフェ エスタシオンの藤ヶ森 高子 氏に運営をしていただきます。

3つ目の新ビジネス創出コミュニティは、起業家同士の交流促進を目的に、野田 賀一氏と株式会社リモットさんを営む田中 美華 氏に運営をしていただきます。続いて裏面をお願いします。

「③コミュニティマネージャーの役割」でございますが、コミュニティ活動の企画・実践、コミュニケーションの活性化促進、8サポへの斡旋、外部専門家の招聘、活動状況の共有、コミュニティ活動の広報、外部機関とのネットワーク構築等でございます。

次に、「(2) イベント・交流会の開催」でございますが、明日21日に八戸まちなか広場「マチニワ」を会場として、キックオフイベントを開催いたします。当日は、わかる事務所の玉樹 真一郎 氏による基調講演のほか、3名のコミュニティマネージャーによるコミュニティ紹介やパネルディスカッションを行います。また、今年12月と来年3月に、全てのコミュニティメンバーが集まる交流会を開催する予定としております。

「4愛称の設定」につきまして、企業支援プラットフォームの愛称でございますが、この機会に多くの皆様に8サポを身近に感じていただきますよう、相談窓口の愛称を「8サポdesk」。交流基盤であるプラットフォームの愛称を「8サポmeets」にしております。

最後になりますが、チラシをお配りさせていただいてございます。先ほども説明しましたが、明日15時からとなっております。定員50名でございますが、本日現在で58名の申込の方をいただいておりますが、出席お考えの方がございましたら、ぜひ出席いただければと思います。開会は15時、市長の開会挨拶から始まりまして、玉樹先生の基調講演、そしてコミュニティマネージャーからの説明とパネルディスカッションと続いてまいります。明日の気温は12度ということで非常に寒いかもしれませんが、皆様の熱い議論が交わされると思いますので、ぜひよろしく願いいたします。以上でございます。

○熊谷会長(八戸市長)

最後に商工課から説明させていただきました。皆様方の御協力をよろしく願いいたします。それでは、事務局は本日頂いた各委員の意見を踏まえつつ取組を進め、次回の会議にて進捗等を報告いたします。それでは司会へ進行をお返ししたいと思います。

○司会(八工大・高橋教授)

ありがとうございました。最後に、今後のスケジュールの確認です。次回は令和6年2月26日の開催を予定しております。開催が近づきましたら、改めて御案内差し上げますので、どうぞよろしくお願いいたします。

それでは、これをもちまして、「令和5年度 第1回八戸産学官連携推進会議」を終了いたします。本日はありがとうございました。